

ときめきリーフノベル

百匹のオオムラサキ

文・高安義郎 絵・芝章一



陽介は親や周囲に強いられ、好きでもない勉強をし、窮屈を感じながら大卒を卒業すると中流企業に就職し五年ほどが過ぎた。社会人になればなつたで今度は営業成績を競わされ、上司の顔を伺いながら働くことに大きな疑問を感じた。人間はもつと自然の中ののびのびと生を謳歌するべきだ、とつくづく思うのだった。

そんなある日陽介は中学時代の仲間が飼育している国蝶のオオムラサキを見せて貰い、自分も飼ってみたくなつた。そこで食草のエノキを庭に移植しそれを大きな防虫網で囲った。

「このビオトープでオオムラサキ百匹の楽園を作るぞ」そう意気込み百個ほどの卵を譲り受けた。

一週間ほどした七月の下旬、孵化した幼虫達は卵の殻を食べ、エノキの枝のあちこちに散らばって行った。更に

一週間ほどすると幼虫達は二齢になった。オオムラサキ特有の小さな角が出た。背中にも三対の突起が出た。見るとエノキには沢山のワタムシが真綿のように群がり、木の根元からはアリが登っていた。これを見て陽介は、これこそ生を謳歌できる自然そのものだと思つたと嬉しくなつた。

幼虫が三齢になつた頃アリの数が異様に増え、良く見ると一匹の幼虫にアリが群がっていた。アリが幼虫を食べていたのだ。陽介は思わずアリ共をつぶし、ついでにワタムシをはたき落として幼虫の数を数えた。百匹いるはずの幼虫がどう数えても四十四匹ほどしかない。孵化できなかつた者が一割としても半分以上がアリに食われたことになる。自然界に潜む残酷な一面に陽介は身震いした。

十月になり一センチほどの四齢幼虫

になつた。角の先が赤く全身緑色で人は気持ち悪がり近づかないが陽介には愛しささえ感じた。

やがて幼虫は黒ずみだし、十月の末には枯れ葉と同じ色になってエノキの根元に降りはじめた。雨水に濡れたりアリに殺されたりせぬよう、枯れ葉にくるまわっている幼虫を木箱に入れて越冬させることにした。

越冬期間は長かつた。十月下旬から翌年の五月頃まで飲まず食わずで眠り続けたのだ。越冬中に十匹ほどが干からびて死んだ。

五月のある日、箱の中の幼虫が目覚めました。目覚めた幼虫を芽吹いたばかりのエノキに移すとその日から旺盛な食欲を見せ、一日に一ミリほどの速さで成長した。

数日で五齢幼虫になつた。木に登る力が弱い者や葉の無い所に上りつめ飢え死にした者など十匹ほどが死んだ。

幼虫がエメラルド色になり五センチほどに成長すると、陽介は誇らしきささえ感じた。

ある日一羽の鳥が網の隙間から入り込み幼虫をくわえて飛び去るのを見た。急いで網を直し幼虫を数えると十五匹しかいない。全滅は免れたものの弱肉強食の世界が恨めしく思えた。

更に六齢になれたのは十二匹だけであつた。その頃エノキの葉はほとんど食べ尽くされており、毎日のように里山からエノキの葉を取ってきては与えた。

十二匹は順に蛹になり始めた。「蛹になれば安心だ」そんな独り言を言いながら羽化を待った。

一週間ほどして覗くと、何とまたもやアリが蛹をむさぼり食っていたのだ。体を食いちぎられた蛹が数匹地面に落ちており、九個あつた蛹はどうとう五個になつた。

ある日羽化が始まつた。感動の瞬間だつた。数日後オオムラサキと更に一週間後メス一匹が誕生した。だが傷があつたのか一匹のオスは羽根が伸びきらず飛ぶことが出来なかつた。

自然界ならともかく、ケージで守つてさえ五%しか生き延びられない自然の過酷さを陽介は実感した。そして戦うことが自然界だつたのだと今更ながら思い知らされたのだ。同時に過酷な自然を生き延びた蝶にどんな喜びがあるのだろうか、そんなことを考えた。

一週間ほどして葉に卵が産み付けられていた。産卵後の蝶達は何故かゆつたりしている様に見えた。世代を繋ぎ終え、生き物としての役目をまっとうした満足感にも見えた。

ふと陽介は、自分の生活を厳しい物に感じ、自然の中でのんびり生きたいとうそぶいていたことが恥ずかしく思えた。

陽介は網を開くとオオムラサキ四匹を青空に放つたのだつた。